

- ◇職員採用試験 (6面)
- ◇県内一長い桜並木へ愛称を (6面)
- ◇肺炎球菌ワクチンの定期予防接種 (7面)
- ◇一瞬のきらめきを ダイヤモンド富士 (7面)
- ◇カメラスケッチ 夏の思い出 (8面)



市民の

秦野の

カ

だ!

が

地域の課題を解決するため、自発的に取り組む市民の力を「市民力」といいます。その原点は「自分の住むまちをよりよくしたい」という気持ち。今号では、さまざまな分野で市民力を発揮している人取材し、活動にかける思いを紹介します。

5面まで市民力特集

# ひと×地域

# 生きがいのある暮らしへ



利用者と、かるたを楽しむ職員やボランティア(介護施設「あふり」)

## 触れ合いを求めて誕生

「次は誰の番かな」「もう1枚大丈夫ですよ」楽しそうな声が室内に飛び交う。ここは、NPO法人「みきフレンド」が運営する介護施設「あふり」。デイサービスの利用者が職員やボランティアと百人一首の坊主めくりに挑戦している。

「地域との触れ合いを大切にしたい」と思い、母と一緒に活動してきました」

と話すのは、理事長の小森合健児さん(43歳・名古屋)。健児さんの母、君江さん(68歳・西田原)は、障害のある長女、実季さん(24歳)の誕生を機に福祉に興味を持ち、ホームヘル



歌に合わせて、振り付けをする橋本さん(左)



利用者と楽しく語らう健児さん

パーの資格を取得。自分と同様に障害のある子供を持ちながら、介護の仕事をする母親たちに呼び掛け、仕事は5、6人で互いの子供の面倒を見た。日々の生活の中で、介護と育児の拠点が一つだったらと願い、地域の協力を得て現在の、みきフレンドの原型を築いた。

「必要に迫られて、家族ぐるみで地域の皆さんと無我夢中でやってきたことが、今の私たちの活動に結び付いていますね」

君江さんは目を閉じて振り返る。実季さんの名前が由来の、みきフレンドは、現在、市内3施設で約70人の高齢者や障害者に介護サービスを提供している。また、ボランティアが指導する教室や季節の行事などを取り入れ、地域との触れ合いの場をつくりだしている。

## 気付きと役割を大切に

「1日があつという間ですよ。ダンスや歌でこんなに気持ち明るくなるなんて、始めは想像できませんでした。次の利用日が待ち遠しいくらいです」

2年前から施設を利用している橋本和子さん(88歳・鈴張町)は、はつらつと話す。

夏休みを利用し、ボランティアとして施設を訪れた東中学校3年生の重田匠哉さんは、



高齢者と1日を過ごした重田さん(左)

「お世話をするつもりで来ましたが、一緒に楽しく食事をしたりゲームをしたりするうちに、逆に元気をもらって驚きました」

と心境の変化を語る。家にいる祖母の姿を重ね、改めて大切にしたいと思ったという。

「高齢者と若いうちに接することで、自分を見つめ直し、何かに気付くことが大切。これが行動の第一歩につながります」

あふり管理者の安藤良太さん(36歳・千村三)は、力を込めて話す。

6年前から、利用者や家族と一緒にボランティア活動として行っているごみ拾いも、地域との関わりを目的としている。8月中旬、西田原付近のごみ拾いに、約20人が集まった。毎回参加している利用者の小澤里美さん(45歳・東田原)は、団体の中心核。大きな袋を持ちながら要領よく黙々と拾っていく。

「いつもありがとう」「お疲れ様顔馴染みの近所の人が口々にあいさつをすると、顔を緩めて、元気に手を振る。また、

「今度は、この道に入るよ」と遅れがちな仲間を気に掛けながら

「高齢者や障害者はサービスを受ける側だと考えられがちですが、できることはたくさんあります。そのことを地域の方にまず、理解してほしいです」

## 認め合い支え合う

互いに認め合う心があれば、それが行動の後押しになると強調する健児さん。

「やがては、高齢者と障害者が一つ屋根の下で、家族や地域と支え合いながら、生きがいや役割を持って暮らせればいいですね」と目を輝かせる。介護する人もされる人も自分らしく生き、いつも幸せを感じることが理想だという。

生活の必要に迫られ家族や地域と共に歩んできた、みきフレンドの歴史には説得力がある。一人一人が支え合う生きがいのある暮らしの実現のため、今後の活動に期待する。



ボランティアの中学生に指導する小澤さん(左から2人目)

# ひと × 動物

## 小さな命を救う

救える命がある限り

行き交う人がのぞくケージの中には、愛らしい2匹の子猫。保護されている猫の新しい飼い主を探す里親会が、8月上旬、本町公民館で開かれた。主催したのは、野良猫の保護や里親探しなどを行っている「相模どうぶつ愛護の会」。

「この子たちは、人間のわがままで捨てられたんです。誰か里親になってくれませんか」

小さな体で、人一倍大きな声を出していたのは代表の佐藤桂子さん(73歳・南矢名)。佐藤さんが動物愛護活動を始めたのは、30年以上前の昭和58年ごろ。

「当時は野良犬が多く、家の周りにも何匹もいました。施設に収容されれば、大抵は殺処分ですからね。何とかしてあげたかった」



里親会に訪れた人へ里子(猫)の説明をする佐藤さんら

小さな命を救いたいという思いから、動物愛護団体に参加するようになった佐藤さん。施設に収容された犬の飼い主を探す活動をし、多くの命を救った。平成16年には、相模どうぶつ愛護の会を立ち上げ、市内を中心に活動の輪を広げた。

佐藤さんらボランティアの活動などが実を結び、昨年度、県内4カ所ある動物収容施設のうち、2カ所で犬の殺処分が初めてゼロとなった。

「今までの苦労が報われたようで、本当にうれしかった。ずっと続くよう、これからも活動をしていかなければいけないですね」

犬や猫の殺処分の件数は、減少傾向にある。しかし、依然として多くの命が奪われているのも事実だ。救える命、救わなければいけない命がある限り、佐藤さんは活動を続けていく。

### 命のバトンをつなげて

家の中を元気に走り回る3匹の猫。優しい飼い主のもと、幸せな毎日を送っているが、以前は捨て猫だった。「最初は人を怖がっていて、知らない人が来ると、すぐに隠れてしまいました」と話すのは、飼い主の馬場理恵さん



保護している犬に餌をあげる佐藤さん



猫との生活で幸せいっぱい馬場さん夫婦

(曾屋こ)。馬場さんが3匹と出会ったのは今年1月。既に飼っていた猫の遊び相手に、もう1匹飼いたいたいと思っていたときだ。

「せっかく飼うのだから、何かの役に立ちたくて、捨て猫の里親になろうと思いました」

相模どうぶつ愛護の会のホームページを見つけた馬場さんは、すぐに佐藤さんに連絡をした。保護されていたのは、3匹の兄弟猫。

「3匹が兄弟だと聞いて、1匹だけ引き取っていいものか悩みました。兄弟が離れ離れになれば、また辛い思いをさせてしまうかもしれないので」

夫の勇治さんと相談して、3匹の里親となることを決めた。命のバトンが繋がった瞬間だった。

「1匹でもなかなか里親が見つからないのに、同時に3匹も。まるで夢のようでした」

そのときのことを、うれしそうに思い出す佐藤さん。  
「新しい生活が始まった3匹だが、生活が変わったのは、猫だけではな

かった。

「この子たちが来てから、夫婦の会話が前にも増して多くなりましたね。幸せにしてもらったのは、むしろ私たちのほうです」

笑顔で話す馬場さん夫婦。動物が幸せに暮らせるということは、人も幸せに暮らせるということなのだ。

### 解決の鍵は地域の輪

心温かい人たちによってつなげられる命のバトン。しかし、動物愛護への理解は、まだ十分とはいえない。その原因の一つとなっているのが、野良猫による近所トラブルだ。

「全ての野良猫を保護して、里親を見つけたら、問題は解決するかもしれませんが、現実的には不可能です。大事なことは、野良猫を野良のままにしないことなんです」

力を込める佐藤さん。そのためには「地域猫」の普及が不可欠だという。地域猫とは、野良猫に不妊・去勢手術をした上で、個人ではなく地域全体が飼い主となり、猫と共生してい



保護されている猫たち。小さな命を守るため、野良に戻してはいけない

くという考え方だ。

「地域猫というと、地域の全員で面倒を見るものだと思うがちですが、面倒を見るのは、希望する人だけです。それ以外の人は、餌場の管理や、ふんの始末がしっかりと行われることを条件に、猫の存在を容認するだけでいいんです」

定期的に啓発活動を行っている佐藤さんだが、なかなか理解は得られない。皮肉なことに野良猫によるトラブルが多い地域ほど、話し合いの場は持たれないという。

「動物に関するトラブルの多くは、地域のコミュニケーション不足が原因。動物の問題は、地域の問題でもあるんです」

問題解決の鍵は、地域の輪にあると訴える佐藤さん。動物の問題を解決するには、まず地域の問題を解決することが必要だ。動物との共生を目指すことは、結果的に人にとって住みよいまちを目指すことなのかもしれない。



全ては、ココから始まった

ココハダを立ち上げた、あかみじろうさん(左)と田上貴之さん(右)

ひと×発信

伝えたいのは「愛」と「夢」！熱き秦野の市民メディア

8月初めの夜の秦野駅。仕事帰りのサラリーマンが行き交うロータリーの一角に集まる。大人たちの姿勢が、何やら色鮮やかな冊子の束を抱えて、話をしている。

「それぞれ担当の店に配布したら、電話で連絡を取り合おう。」

そう話す、皆一目散に車で出発。彼らが手にしていたのは、秦野の魅力を紹介するフリーマガジン。中を開くと、秦野のローカルなおススメスポットやイベントなどが、にぎやかなタッチで紹介されている。

「秦野は緑豊か水もおいしい。観光名所だつた。でも、まだ知られていない良さがたくさんあると思うんです。」

と話すのは、田上貴之さん(31歳)。



ココハダII情報の玄関に

このフリーマガジン、秦野を盛り上げてくれる人を「ココハダ」と呼び、毎号紹介するのが面白いところ。今回のココハダは、鬼ごっこを現代風にアレンジし、大人も子供も運動を楽しめる「スポーツ鬼ごっこ」の普及を目指す、太田雅文さん(46歳・堀西)。

「こうして身近な人に広めてもらえると、心強いです。それに彼らは、実際に参加して一緒に盛り上げてくれるんです。」



子供のような大人で

尾尻。「ココから秦野、略して「ココハダ」の代表を務める。若き発起人だ。この団体の始まりは、駅前の居酒屋での雑談だった。

「その店長さんと、秦野にはまだまだ活気が足りないねって話をしていたら、「秦野にはフリーマガジンがない」って気付いたんですよ。それなら一緒に作っちゃおうかって。自分たちならではの目標でまちの愛を引き出して、「ココハダ」を見れば秦野が分かるものにしてあげようって考えたんです。」

ひよんなことから、飲み仲間も交えた4人でトントン拍子に発足したココハダ。その勢いで協賛店舗を募って発行に必要な広告費を集め、去年8月には第1号を1万部発行。現在は20歳から72歳まで、19人のメンバーが参加し、今回で4号目の発行にこぎつけた。

この日、彼らが向かったのはフリーマガジンを置く市内の協賛店舗。最新号を笑顔で出迎えたのは、大秦町にある接骨院の鈴木院長。

「記事を見ながら、こんなに面白い場所やお店がこのまちにあったのかと、毎回びっくりしています。最近では、フリーマガジンを見て来てくれたお客様もいますよ。」

彼らが作るフリーマガジンが、新たな発見を広めていく。

「今日は目立ったごみはなかったね。生い茂った葉が覆いかぶさって車道が半分になってしまおうくらいだったよ。」強い日差しが照りつける夏の日、掃除をする弘法山をきれいにする会の会員。南矢名方面、曾屋方面など、それぞれが通ってきた道の状況を話しながら手を動かす。会員のうち、誰かしらが毎日掃除をしているよ。たくさんの方が気持ちよく山を歩けるように、いつも情報交換しているんだ。」

穏やかな口調で話すのは、代表の三橋俊彦さん(79歳・本町)。

弘法山をきれいにする会は、平成17年、市の公園などを市民の手で管理する「公園里親制度」に登録するため、結成された。現在、59歳から81歳までの57人の会員が、約6万坪もの面積を持つ弘法山公園の美化に努めている。会員の3割以上は、何年も前から自主的に活動していたため



権現山山頂へ続く階段の掃除をする会員



情報交換を大切にしている三橋さん

「目を覆いたくなるほど汚かった。運び出すのが大変な大きい椅子が放つてあったり、空き缶や弁当のごみが散らばっていたり。頑丈に設置された標識が割られてしまったこともあったよ。怖かったね。」

うっそうとした鬱開気味で、地元の人でさえ近寄りたくない山だとして三橋さんは言う。多くの人が自然を楽しめる、にぎやかな山にしたいと強く願う。ごみ拾いを始め、現在も仲間と続けている。

転んでけがをしたこともあったが、痛みを我慢しながら掃除を続け、不法投棄の処理も行った。布団や椅子などを片付けるため、車で、山ごみ処理場を何度も往復した。

当初、一週間で大きなビニール袋10枚以上も集まったごみの量が、日々の活動で、最近ではその3分の1までに減った。不法投棄もほとんど見られなくなった。ごみを探しながら歩くようになったと、三橋さんは笑う。

弘法山へよく散歩に出掛けるという森広子さん(64歳・曾屋)は、「山頂へ行くまでのいろんな道からごみを拾ってくれるんです。季節ごとに咲く花が、いっそう鮮やかに見

ひと×自然  
誰もが親しめる山に

目をきたる山をきれいにする会

顔なじみのメンバーだ。会の発足前後で変わることもなく、それぞれが自由に活動している。役割も作らず、会費も取らない。役員もいない。清掃区域の担当も割り振っていない。「ナイナイづくしの会だ」と三橋さんは笑う。しかし、弘法山に愛着を持ち、きれいにしたいという思いはみんなが持っている。どんな団体よりも強い愛がある。」

人が集う公園を目指して

今では気軽に景色を楽しめるハイキングコースとして紹介される弘法山公園だが、以前は全く別物のようだった。

「目を覆いたくなるほど汚かった。運び出すのが大変な大きい椅子が放つてあったり、空き缶や弁当のごみが散らばっていたり。頑丈に設置された標識が割られてしまったこともあったよ。怖かったね。」

うっそうとした鬱開気味で、地元の人でさえ近寄りたくない山だとして三橋さんは言う。多くの人が自然を楽しめる、にぎやかな山にしたいと強く願う。ごみ拾いを始め、現在も仲間と続けている。

転んでけがをしたこともあったが、痛みを我慢しながら掃除を続け、不法投棄の処理も行った。布団や椅子などを片付けるため、車で、山ごみ処理場を何度も往復した。

当初、一週間で大きなビニール袋10枚以上も集まったごみの量が、日々の活動で、最近ではその3分の1までに減った。不法投棄もほとんど見られなくなった。ごみを探しながら歩くようになったと、三橋さんは笑う。

弘法山へよく散歩に出掛けるという森広子さん(64歳・曾屋)は、「山頂へ行くまでのいろんな道からごみを拾ってくれるんです。季節ごとに咲く花が、いっそう鮮やかに見

力を感じる。

「ココハダは、体当たり取材がモットーですわ。」

そう語るのは、取材を担当した小松山茂雄さん(37歳)。記事を書き終えた今も、休日のイベントに参加し、子供と汗を流している。

「このまちに足りなかったのは、大人が全力で楽しむ場だと気付かされた。たくさんの人に伝えたくなりました。」

個々のメンバーが取材した原稿は、打ち合わせやインターネットを通じて何度も校正され、最終的に2人の編集担当が形にしているという。そのうちの1人が、72歳の絵師、「しるひび」と門脇信夫さんだ。

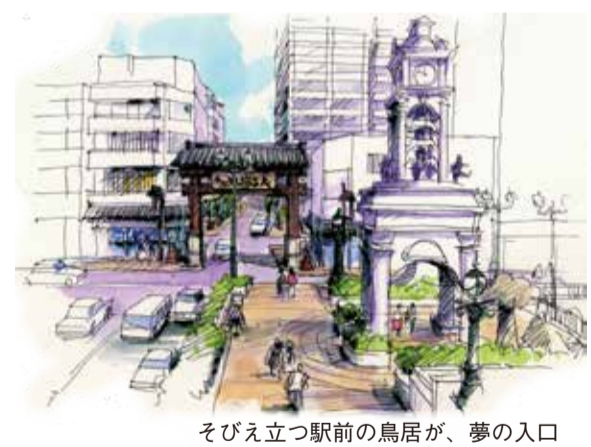
「元々だの飲み仲間だったんだけど、同じ秦野好きと思ってくれてたんだろね。急に一緒にやろうって誘われて。若者がキラキラした目をして言うもんだから、やってみようかって。」

そんな門脇さんが、一人で担当しているページがある。それが、「秦野未来予想図」。建築デザイナーだった経験とスケッチの腕を生かして、「秦野駅前の温泉テーマパーク」や「弘法山公園のツリーハウス」など、自分の望むまちの未来を自由に描き描いている。

「これが実現するかどうかは二の次なんです。一番の願いは、これを見た人が「自分だったらこうしたい」と考えてくれること。それがまちの元気につながりますから、そのまっすぐな瞳は、まるで少年のようにキラキラしていた。」



夢の「秦野未来予想図」を描く門脇さん



そびえ立つ駅前の鳥居が、夢の入口

今年5月、全国の半数以上の自治体が、約30年後には消滅する可能性がある」と発表され、話題となりました。本市は該当しませんでしたが、決して楽観できる状況ではありません。しかし今回、さまざまな団体取材し、多くの市民の方の話を聞いて、秦野には希望があると感じました。確かに、課題はありますが、それ以上の「市民力」が秦野にはあります。活動する分野や、取り組みは異なりますが、秦野を元気にしたいという思いは同じです。

何かを始めるのは大変で、面倒なものでも、少しでも自分たちのまちを、よりよくできるのかを、それが、秦野を元気にする第一歩につながります。

ココハダはフリーマガジンだけでなく、動画の撮影も手掛けていて、インターネット上で配信している。その中心人物が、田上さんとココハダ発足のきっかけを作った居酒屋の店長、通称「あかみじろうさん」(42歳)。登場人物にアニメキャラの格好をさせるなどして笑いを誘いながら、おススメスポットを紹介する。「受け手の心にストと入りやすい情報は、やっぱり動画。紙面で伝えきれない部分は、こうして別のメディアで補えばいい。」

商店街のイベントなどに、ビデオカメラ片手に積極的な足を運ぶ。先月3日に東海大学前駅の駅前広場で開かれた夏祭りでは、若手音楽プロデューサー、望月翔太さん(22歳・ひばりヶ丘)が束ねるグループ「Canon」のライブが会場を盛り上げていた。その中で響き渡ったのは、秦野への思いをパレードにのせたオ



「人をつなぐ」発信を

リジナル曲「ココから秦野」。

「初めは、自分の住むまちで活動したいと思っただけ、居場所が全然なかった。そんなとき、ココハダの人たちが楽曲の作成を依頼してくれて、紙面や動画で一先懸命PRしてくれました。びびりしましたよ。ああ、こんなに熱い大人もいるんだなって。」

望月さんの強い感謝の言葉。その気持ちに触れ、あかみじろうさんも自分たちの役割を実感する。

「ココハダが大きくなるよりも、つながりを増やしていくことが、まちの魅力を伝える最高の手段。情報発信をすることが必要だと感じています。」

田上さんも、活動への思いを新たにす。

「活動を応援してくれる人もいる反面、盲目的と勘違いされてしまったら、時には「自己満足じゃない」という声を聞いてしまいます。まちの魅力だけじゃなく、自分たちの活動の意味もしっかりと伝えていかないとイケませんね。」

いつか「FM秦野」を作ったらラジオでの情報発信もしたいと、笑顔で野望を語る田上さん。今後、彼らが「ココから」何を発信してくれるのか、熱い心を持った市民メディアに期待したい。



仲間との会話を楽しむ正重さん(中央)

「山ではみんな友達だよ。掃除や見回りで登るけど、みんなと話す時間が一番の楽しみ。」

と話すのは、正重勤さん(75歳・南矢名)。けがのリハビリのために弘法山に登り、片手間に始めた掃除だったが、朝の仲間との語りいで、一日を気持ちよく過ごせるという。今では三橋さんと連絡を取りながら、毎日歩いてると、危険な場所や自然の変化にすぐ気付く。正重さんは、南矢名から弘法山へ続く道で人が転ばないように、会員と協力して間伐材を使って段差を作った。しっかりと固定された手製の階段は、通行する人を安全に迎える。冬になると霜が溶け、地面がぬかるみ危険なため、会員みんなで男坂や女坂の階段に木片のチップを敷き詰めた。また、景色のよい場所や登山道の途中などで休憩できるように、20力所に、ベンチを設置した。

「ごみを拾って」てありがたう」と言われるとうれい。特にベンチは、観光客に喜ばれてね。もちろん私たちももっとできる場所なんだ。」

三橋さんらは、誰もが快適に利用できる公園づくりに力をつけている。「初対面の人もあいさつしてくれる。中には、掃除仲間になる人もいますよ。みんなの愛情が、山のきれいに繋がっている。」

多くの人が弘法山を身近に感じ、足を運んでくれるよう、弘法山をきれいにする会は、これからも楽しみながら活動を続けていく。



手製の階段を安心して歩く女性たち





カメラスケッチ

# 夏の思い出



県立秦野戸川公園の「川遊びゾーン」は、たくさんの親子連れでにぎわいました。丹沢の山々から流れる、冷たくてきれいな水に、子供たちは大興奮。山だけでなく川も楽しめるのが、秦野の魅力です。



2メートル以上の高さに成長した、飼料用のトウモロコシで作られた「デントコーン迷路」。大人も迷うほどの本格的な迷路に、多くの子供たちが挑戦しました。



はだのこども館の職業体験は毎年大人気です。美容師や消防士など、憧れの職業に触れようと今年も多くの子供たちが参加。また一步、夢へと近づきました。



ペットボトルで作ったキャンドルに、平和の火をともし「ピースキャンドルナイト」。参加者の平和への思いが、約1万個のキャンドルに託されました。